

良い子の〇〇どこ行ったあ？

院長 石川 丹

幼児さんのお母さんから「態（わざ）と悪い事をする、親の目を窺いながらいたずらする、ニヤニヤしながら叱られることをする」場合はどうしたら良いか？、とよく質問されます。

親の立場からすれば、好ましくないことをするわけですから、反抗と映ります。

反抗とは何でしょう？

親にとっての反抗は子にすればすごく強い自己主張です。自己主張は大事なことで、主張した後で、折り合いを付ける、顔の立て合いこっこ、をすることが更に大切です。子どもの反抗行動の中の自己主張を尊重してあげないとトラブルはこじれてしまいます。

今や“世界のたけし”のビートたけしはツービートという名の漫才コンビの片方として相方に盛んに毒舌で突っ込んで人気が出ました。毒舌はブラックユーモアです。子どもの「態と～、親の目を窺いながら～、ニヤニヤしながら～」の行動は親の目を引き付けるためのブラックユーモアに相当します。子どもは、良い子をやるよりちょい悪をした方が親は注意するために自分に注目する、と子どもは学習してしまっていて、悪ぶってるというわけです。

ブラックユーモアは一瞬相手をギクッとさせて注意を自分に向けさせる処世術です。普通のユーモアは人を面白がさせたり笑わせたりして和気藹々の雰囲気を作る社交術ですので、ホワイトユーモアなのです。ブラックユーモアはおちょくりの場合もあります。ブラックユーモアは漫才に例えるなら、突っ込み、です。突っ込みに突っ込み返して笑いを取ったのが“コント55号”の欽ちゃん二郎さんでした。突っ込みに対してボケたりおちょくり返したりする漫才は、ブラックユーモアをホワイトユーモアに変えて笑いを取る、漫才です。

多くのお母さんたちは幼児年齢の子がブラックユーモアをまさかするとは思っていないので、直ぐに注意してしまい、子どもの本音を無視してしまうので、子どもはますますブラックの色を濃くして、しつこく一見悪さ行動を続けちゃう事になるのです。

だから、子どもが「態と～、親の目を窺いながら～、ニヤニヤしながら～」の一見悪さ行動をしたら、大人は直ぐには怒らないで、つまり、突っ込み返さないで、おちょくり返したりボケたりすると、むしろ子どもは突っ込みを止めて、良い子を演じるようになります。

大人がボケて丸く治める方法をお教えします。

まずは、褒める時、例えば洋介君なら「良い子の洋介に成ったね」と褒めるようにしておいて下さい。「良い子だね」ではなく「良い子に成ったね」が重要です。こうして普段から言わば“種まき”をしておきます。

そうして、叱らなきゃならない時は、先ず「良い子の洋介どこ行ったあ？ 良い子の洋介おいでえ、良い子の洋介来たらママうれしいなあ」などと言って下さい。

「悪い子に成ったね」と言うのと逆ギレして却って手を焼く事が有るので、「悪い子」という言葉

は使わない方が良いです。「悪い子」と呼ばれて喜ぶ人はいませんからね。

「良い子の〇〇どこ行ったあ」と声掛けすると、子どもは自分が良い子に成っていないのに気付きます。そうすると、頭ごなしに怒られてはいないので、カッカカッカが少くなり、聴く耳が育ち、言わばダンボの耳になり、「良い子やんなきゃ」という気持ちが芽生えて、ブラックユーモアを止めて良い子の振る舞いをするようになります。

始めの内は「良い子、いなあい」と言ったり、言葉が遅い子では向こうを指差して「良い子、あっち」とでも言うように振舞って惚ける子もいますが、「良い子の〇〇どこ行ったあ？」を繰り返していると言っていると、やがては「良い子に成るっ」とか言いながら良い子の振る舞いをするようになります。

言葉が遅れているR君は、3歳10ヵ月になって褒めてもらえるはずの行いをした時、自ら「今、良い子のR」と言ってアピールするように成り、母が怒ると「ママ、悪い子のママ」と言い返すように成りました。何と微笑ましい事でしょう。

9歳の自閉症のS君に母が「良い子のSどこ行ったあ？」と声掛けしたら、『良い子のSに戻るの』と言いながら母の言う事を聞くように成りました。また、S君は『頑張るよう』とか『もうすぐゴール』とか言いながらドリルをするように成りました。自分で自分を励ます事ができるように成りました。

「そんなことしたらママ悲しい」と泣き真似したり、「くすぐっちゃうから」と言いながらくすぐる振りをしたりすると、子どものブラックユーモアがホワイトユーモアになって親子共々にこやか和やかになり、和気藹々の明るい雰囲気になる事が多くなります。

ブラックユーモアに対して頭ごなしに怒り続けると、子どもは“ずる賢いのも智恵の内”の智恵を発揮して、クレヨンしんちゃんのみさえお母さんみたいにキリキリ舞いさせられる事になっちゃいます。だから、おちょくり返したりボケたりしてホワイトユーモアに変えることが大切です。

しんちゃんのお父さんは「しんのすけ、ふざけるなよ、父ちゃんもう寝るから」とか言って相手にしないでボケてしまう事が多いので、みさえお母さんのようにキリキリ舞いさせられないのです。

さて、2～3歳の時期を反抗期と言います。2歳過ぎると子どもはいろいろと自己を主張し、ああでもないこうでもない、とか言って親の言う事をスムーズに聞かなくなります。子の頃の子を持つ母親は子育てに苦戦を強いられますので、心の中で密かに時に「こんな子、もう要らないっ」と思う事のない母親はいません。スッタモンダの後、4歳になると「我慢ができるように成ったね」と思ってホッとするものです。

我慢とは何でしょう？ 我慢とは自己説得なのです。自分で自分に言い聞かす事です。良い子の自分が良い子でない自分に言い聞かせて、親の言い分を飲むように自ら仕向ける事です。例えば、善玉悪玉という二重人格に成る事です。万引きした警察官は、頭の中の善玉が悪玉に負けちゃったから万引きしちゃった、と言えましょう。「ママ、天使に成るから許してね」と言って叱られる前に叱られないように予防線を張った知恵者の子がいました。

良い子に成ってる、良い子に成っていない、と子どもがしばしば思うとすれば、それは“二重人格作りをしている”と言えましょう。

“顔で笑って心で泣いて”という諺を理解し実践する事が大切です。